

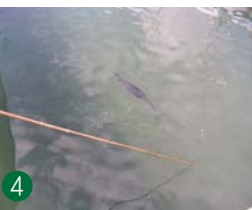
伝統漁法を引き継ぐ 市集落の漁師



漁師 栄 唯一 (さかえ ただいち)
〒894-1321 鹿児島県奄美市住用町大字市

住用市集落のみに伝わる伝統漁法さわら突き漁を行っている漁師のひとり

取材協力：山下茂一



- 1 餌木を泳がせながら、集まったさわらをもう一方の手に持った銚で突く。
- 2 荒崎展望台から臨む市港の全景。
- 3 喜界島と市の神様たちが取り合ったという伝説が残るトビラ島
- 4 袋状の餌木。本物のさわらの様に泳ぐ。
- 5 黒い部分が牛の角、木の部分はイヌマキ、毛の部分はヤギのひげで作られた餌木。

住用町市(いち)は、奄美空港から車で2時間、名瀬から40分程の太平洋側に面した集落です。その昔、市は中国船なども寄港し栄えたといふ港です。また喜界島との間でトビラ島という小島を取り合ったという伝説も残っており、喜界との交流もあったことをうかがわれます。

その市集落で生まれた栄さんは63年の間、漁師としてこの集落にのみ伝わる伝統漁法さわら突き漁を行っています。

栄さんの使っているこの舟は4代目でプラスチック製ですが、サバニと同じ形をしています。初代のもは奄美独特の板付け舟で帆を立てて漁に行っていたそうです。

さわら突き漁は餌木を使って魚を誘い出し、銚で突くというシンプルな漁法であるがゆえに、餌木の出来が釣果を左右します。

漁には牛の角、イヌマキの木、ヤギのひげで作られた餌木を使います。木目に魚が寄ってくるので、漁師は木目の良いイヌマキを探すのだそうです。現在はさわらそっくりのこいのぼり状の袋の餌木も使っており、これを泳がせると仲間と間違えたさわらが寄ってきます。

*1 琉球列島の古くから使われていた漁船の形
*2 舟の前後が同型の舟で、舟底が浅く波切りが悪く速力が遅い反面、どっしりとして安定感があり、素人にも乗りこなせる。

現在は5名ほどの漁師がこの漁を行っており、若い方も数名いらっしゃるとのことです。市の伝統は次の世代に引き継がれています。

しかし本当に不思議なことには、この漁は奄美のいろんな集落で行われている訳ではなく市集落のみに伝わっており峠を越えた隣の集落では行われていません。

さわらの体長は大きいもので1メートル70〜80cm、30kgもあります。またさわらを出いた後、血が流れるためそれを嗅ぎつけたサメが寄ってきます。舟に引き上げられるには注意しなければなりません。

舟で漁場へ向かう途中、崖が崩れて茶色の山肌がおき出しとなつているところがあり、環境破壊によるものなのかと尋ねたところ、「そうではない。自然と崩れた、だから3年もすればまた植物が生えて緑になりました。実際に数年前に崩れたという別の崖がありました。が、その部分だけ少し明るい緑色となっていました。

市には海にも陸にも圧倒的な存在感の自然がたくさん残されています。昔からそうしてきたように、集落の人々はこれからもこの自然と共存しながら穏やかに暮らしてゆくのでしょう。